

沼尻銚一郎編輯
西南鎮靜記

二號

下



A 447
4



48-7897

西南鎮靜記二編卷之下

東京 沼尻絳一郎編輯

第四回

巡查田村忠藏最期
并將淵邊屯田兵と戦ふ

茲^{こゝ}に鹿兒島^{うていしま}縣^{けん}下^げ櫻島^{さくらじま}の中^{うち}赤水村^{せきすいむら}と^ちり^ちの地^ちへ
縣廳^{けんてい}の假^{かり}り出張所^{しゅちやうしよ}を^と取^とり設^まけ^られ^れ巡査醫^{しゆんさいい}
員^{いん}ら^らども詰^{つめ}合^あま^ひと其^その最^も寄^{より}み救恤^{きうしゆ}所^{しよ}を^も
建^たられ^て穴^{きう}躬^{こん}民^{みん}へ米^{こめ}を施^せ與^よされたりま^と六月

十八日午後二時ころ出水口の賊徒の総指揮
とるす伊藤四郎左衛門が宮の城より來
り官軍に帰順す昨十七日拂曉宇土中尉
二中隊と率阿久根街道に向き大斥候と
して午前十時ころカ、ラシユ峠を越えて
岡より一賊二百餘名壘に拠り大砲
小銃を連発すその砲声空に轟き恰りも
霹靂の碎けて落るが如くあり一賊
賊

軍への應撃一千發萬化ふその黒烟の際
とを潜り此所彼所より白刃を閃く切
込とたれど官軍の之を事もせず奮撃突
戦し互ふ火花も散らして戦ひ一終に賊徒
官軍の猛き勢ひに敵一がとくして引退き
しる官軍勇に進んで攻寄たり斯る程に賊
徒は立所も壘を捨て逃ると官軍追撃して
臼砲一門野戦砲二門弾薬一箱分捕賊徒を

田代小遁れざる同日午後十時三十分まで攻
撃一三國峠の官軍勝利して賊徒死骸と棄
て走り去る十五日天明官軍三谷峠下の賊壘
を四斤砲とりつて砲撃奮闘一賊壘の真
中に連発破烈一と是がため泰山も碎
くかと計り小怪一む小至る官軍直小勇
進激烈一賊徒四十名と倒す第二砲の替後
みて破烈一其砲声萬雷の如く山岳とめよ

震ふ小至る逆徒の之小應撃一少一も動く
いろゝ一最も精銳なるより一ふて丈れく兵
と分ちて防戦せ一が官軍の為め又十名と
倒され午後五時三國峠の壘と抜き官軍勝
利一時の追撃せず一て引き揚げたり同二
十日拂曉大口小向ひ進撃一時頗る苦戦の處
遂小同所賊軍と陷一いれ尚進撃一て一里程
前面小官軍進んで防衛線を定む同日大斥

候と阿久根へ向け差し出—既ふ賊壘を援
かんと攻寄する賊軍のため頗る苦戦あり
—かど援兵の着すると待て一齊ふ—此
賊徒とを塵粉ふる—呉れんぞと頻りふ之
ふ應撃—千変万化ふその黒烟の隙とを潜
り奮撃突戦す直ちふ賊壘と乗取り賊
徒と斃す六七人の死骸と棄て奔—るま
同二十一日阿久根へ進撃の爲めゼンヤウノ

隊哨兵線まで兵と進め午前四時進發阿久
根の手前本道并ふ左翼の賊壘と陷—入
れ續て阿久根ふ攻入り賊潰散西方を指し
て走—る官軍尾撃—阿久根と過ぐる事
凡一里計りふ至る賊徒は往還の左右の
山ふ據り防禦するふま—直ちふ進撃—
賊軍とむの鋒を交しへ或ひは進—ある
ひは退—く官軍精練勇猛ありて堂々正々の

官軍三國
峠の賊壘
と追撃す



勢^{いきなり}ひをりつて賊^{ぞく}軍^{ぐん}を敗^{やぶ}るが如^{ごと}く然^{しか}れども
賊^{ぞく}軍^{ぐん}もはと猛^{もう}勇^{ゆう}慄^{りく}悍^{はん}あて砲^{ほう}声^{せい}山^{さん}岳^{がく}の
崩^{くづ}れるが如^{ごと}く黒^{くろ}烟^{えん}原^{げん}野^やを敵^{あか}ひ弾^{だん}丸^{がん}雨^{あめ}の
如^{ごと}く流^{りゅう}血^{けつ}絹^{きぬ}と流^{なが}す假^{たと}令^ひ官^{くわん}軍^{ぐん}之^{これ}れを追^{おひ}落^{おと}
せしも將^{しやう}校^{こう}以^い下^{くだ}死^し傷^{やう}手^て負^{おひ}もあり賊^{ぞく}徒^との生^な
捕^{とら}九^くそ八^は九^く人^{にん}その他^た賊^{ぞく}の死^し骸^{がい}十^{じゅう}余^{あまり}人^{にん}分^{ぶん}捕^{とら}
砲^{ほう}二^に門^{もん}小^{せう}銃^{じゆう}數^{すう}十^{じゅう}挺^{てい}ありまゝ水^{みづ}俣^{また}かて生^な捕^{とら}
たる逆^{さか}徒^とが所^{しよ}持^ぢせし書^{しよ}面^{めん}の寫^{うつ}し

上^う場^{ばう}出^{しゅ}張^{ちやう}中^{ちゆう}隊^{たい}長^{ちやう}御^お中^{ちゆう}仁^に禮^れ新^{しん}左^さ衛^ゑ門^{もん}

臼^{うす}砲^{ほう}と携^{くわい}力^{りき}へ出^で氷^こ口^{くち}引^ひ揚^{やう}げ来^き候^{こう}得^{とく}ば久^く木^き野^の
口^{くち}頗^{すこ}る難^{なん}義^ぎの様^{やう}子^{すけ}小^{せう}御^お坐^ざ候^{こう}間^ま是^これまど
同^{どう}砲^{ほう}へ付^つ置^おき候^{こう}砲^{ほう}護^ご兵^{へい}十^{じゅう}五^ご人^{にん}相^あ添^そへ至^{いた}急^{きふ}
彼^かの方^{かた}へ御^{おん}差^さ出^{しゅ}可^か給^{たま}候^{こう}若^もし不^ふ罷^は歸^き候^{こう}
り破^や竹^{ちく}三^{さん}番^{ばん}半^{はん}隊^{たい}丈^{だけ}け御^{おん}遣^{せん}し給^{たま}り度^ど決^{けつ}
尾^び相^あ成^{なり}り候^{こう}り速^{すみ}く又^{また}引^ひ揚^{やう}げ来^きり候^{こう}様^{やう}
御^{おん}申^{まう}付^{つけ}可^か給^{たま}候^{こう}也^や

六月三日

今般徴募巡查の編入みより宮城縣みあい
四十三人、滋賀縣みて百人三重縣みて十六人
持命あり滋賀縣の巡查百名至急み引き上
げの御沙汰あり―初めの密りみ苦情とあり
―て兵役み當るべきみありずるど唱へ―者
もあり―とあり縣令龍手田氏の本廳み各々
と集めて面會さるゝ懇ろに説諭され―くバ

一同の感喜の色と顔ハ―て勇々―く出立するに
猶戦地みある西村忠藏の隊へ差迎け―縣令
も殊の外喜をれて龍子田氏の二首の歌を詠れ
管轄境まで見送られたりとぞ

身の碎け屍の野邊みさうにとも

たけき名あげよ萬代の末

こゝれても又逢ふことと逢坂の

関のふりとも待んとぞ想ふ

舊彦根藩の門閥家にてありー西村忠蔵四十二歳
といふ人の先年巡査と拝命ー平常の勤務ふ
怠らざるのそふ兼々より文武ふ心懸ふりく
て事ふ臨て驚うぬ氣象あまふ奉職せら
れたる第三方面四分署中ふもその人ありと
知られたると本年二月西南の支起りーより
該地の出張と命ぜられて各所の戦場と経ら
れーふ五月初旬逆徒豊後ふ侵入ーて重岡より

臼杵へ迫るべき勢ひるりと聞えーうバ肥後
路より直ちふ該地ふ入り賊徒が進む本道ふ
る三重市野津中ふ兵を配り三陣と野村ふ据
巡査隊ハ氷川の此方ふ在る程ふ逆徒ハ兵を
二手ふ分けふ先づ前陣の三重市を攻破り
二陣の野津中ふせまるところ後陣ふ斯くと聞
えーかを勝りこりたる賊兵を平場ふ受けて
邀撃ち各々抜刀ふて狂獅憤虎の威を振ひ

西村忠藏死
力と奮と遂
不最期す



右横左横へと切て廻る逆兵屈する色よく
戦ふ二官兵の物のかずともせず暫時は是と
戦ふもぞ妙策あると川原まぐ備へを引
たる程もよく二陣破れて雪顔かゝる此の時
賊徒の別道より凡そ其勢一大隊横合より
て突入ふ不虞を撃れて士族隊その他も
爰を保ちう乱れて走るを巡査の面々必
死となるる防戦すれど此方の絶る三百人

賊徒の倍する多勢あるれと思はず乱れく退く
中ふ西村氏の毫も擬議せず一步も跡へ退うね
味方の勢力と隔りたるふ賊のましく競ひか
うる我れ討留んと近づくと右ふ支へ左
ふ掃ひ死力を奮つて憤闘すれど身ふの数
ヶ所の傷を負ひて退くべくも有らざりけん
程よく数賊と斬り靡けて川原の岩根に膝
つきつやをう刀と取り直し頂ふ丁と押し

あつるこのとき賊徒に取て返し生擒んとや
 ありひけんヤレ待暫しと留める哉西村氏
 へ耳もかけず勅士の最期ハ斯こそ所れ
 と自首と掻落しそその儘ドウト其處に歩
 伏とる剛氣ふ賊徒も感伏せりとい退ぞき
 兼そその傍ふ忍び一人のんそこの後
 日賊徒の生擒ふありし其ガ物語りいふよ
 るりの頃日肥後と發したる報知るれを

あつるく爰に掲載せり

説云此の西村氏ハ先年佐賀の變動
 より熊本神風黨萩の前原黨ま
 此回の戦争と危険を犯し兩三度の
 難み盡力せし偉功に依て昇等せら
 れ今一等の巡查たるも遂にこの拳
 ふ及びるに惜しむふも猶み餘り
 ありと

鹿兒島縣下より或人のゆへへ郵書ふ載
せ報知なればあるす

一説ふ官軍の戦線へ至つて狭く東西
の海岸より五六町南北へ三十町ふ過
ぎずその中央より賊地へ直徑十二三
町なれば大小砲声日夜絶ず忽論喧兵
の悪口など語よく聞ゆ小生等二百名
餘の者の軍事は閑らず警察専務

みて隔日の當番巡行法の東京に替
れども人民各所へ立退き明家のとな
るを事故少く多き人民の遺留せし
家財を盗むものゝ如斯人民立戻ら
ざるや衣食の不都合なりる
く酒店の漸く二軒開きたり果物の何
れも大きく枇杷の大ききものと圓徑
四寸餘ありまゝと櫻島の婦人の力の強

やまのせうしやうだうの
山田少将大
いさか
隊を率て井
ごんげき
口に進撃す



まこと一俵の米を頭上へ乗せ運送
せり下等の風俗に帯なく赤き細紐
と結び大方農商兼業ふて歩行ふ跣
足多し蠅蚤蚊の夥敷ふに殆ど困却
せりと

又山間僻地の民に至りては果物を食
し飯焚極めて下手ふて毎々仕損ト
たりと云ふ

此のごろ鹿児島島の暑さ何十度
をかりふや炎暑のときハ實に堪
がし懇意ある来客ると互に
一禮が終るや否や直に衣服を脱で
丸裸よりあり夫より談話とする位
ありと云ふ

諸説北海道の屯田兵八百名の徴募ふよう
て来着し東京鎮臺營へ入營せしより此

屯田兵ハ多く舊松前藩の士族にて近日
黒田参議ガ引卒せられ再戦地へ出張
みゐるより、近來の激戦ハ人吉を撃
て陥入れたる時を以て第一とす、最初山
田少將ハ各旅團の向ふ所を定められ過
る五月三十日と攻撃の手始トめと一拂曉
より諸道並び進む中、山田少將ハテルカ
ク通より井口ふす、まゝ六月一日午前

第九時、人吉に進撃し、山田少將の兵士
と指揮する體と視て賊兵の隊長ハ汗馬
と鞭打ち群る官軍の中、馳入り互がひ
に激戦し、或ハ進と或ハ退ぞきつ、兩軍
始トめて兩道に分れ連戦、勝敗あり、且つ賊
兵最つとも強きがゆゑ、兩軍大に窮む
こと數度あり、未だ全捷と得ざれば官
軍ハ此所、土壘を作りて攻撃すべし、策

ありまうと山田少將ハ此所ニあり官兵ヲ進
撃セしめし賊軍ハ弱兵と見ゆて之れハ
應ト別軍をりつゝ陰り山田少將の本
陣の側よりいぞ急ニ進撃したりか
ハ官軍ハ之れを事ともせず奮撃突戦
終ニ賊徒ハ官軍の猛きいきりひみ敵ガと
くして周章狼狽糧食器械と他ニ運輸の
いとまゝく火と城下ニ放つて米良峯に

ありぞく有り或ひハ又加久藤をさして走
るあり實ニ賊徒の意外にいでたるが如く
ええしとての進撃中屯田兵の一隊ハ堀大
佐ガ引率せられ川島より進入するところ
の左翼の兵と隈川より進むところの右翼
の兵とニ連絡し峻嶺を恐れず攻撃しその
砲声天地ニ轟ろき恰も萬雷の落るも斯
やとわやしまるまの方面ニむかひたる

逆將淵邊
高照吉田口
み突戦す



逆將淵邊高照みて一時防戦りたきと
屯田兵が猛進するいさめひ破竹のごとく
みて遂に吉田に敗れ取り此所彼所より
白刃を閃りしつ切込とたれと屯田兵は
これと事ともせむ奮撃突戦りたれば
今ハ相互ひは必死と極め火花を散らし
戦ひその勢ひ最も盛んありしを賊徒は
其の多勢の中み憤戦りて重傷とバ負ひ

つも辛くしつその場を引退せきし
同十六日賊軍病院中み死せし生捕り
たる賊兵が白状せしつみ茲に戦地み
ある将校を慰勞せられんが為め華族會
館より惣代として出立されたる武者小路
實世公板倉勝達公ハ先づ行在所へ天機
伺ひしつ罷出られ六月二十四日に神戸
より乗船して直ちしその地へ下られし

とあるまゝと熊本縣下の官軍の警備救恤
二つあるがら行届らせられおひし士族の逃
隠れたるもの歸る中ふ賊徒も應トたる
士族の家族の遠く在々へ遁れありひを
親戚の家も同居するものも相談のうへ自訴
せしと云ふ

一説ふ曰く當時逆徒らが家族を懇意
あるもて同居させたるものゝ後難と恐

れく同居を断りりおろそく喜提所へ
たより夫さへ断りられて今の何処か
ても同居さするものも絶えてありり
けをを詮方なくも明家無住の寺院
るどふおいて雨露を凌ぎ山野を彷徨も
の少みからずと聞えたれば賊徒も應ト
たる本人の格別その家族も至りりへ
さしと厭悪べくもあらず縁故ある

そのるどい随分懇ろる世話り遣い
すべりと官より區戸長へ布達ふり
しかば賊徒の家族ひもさるる一
般の人民も御仁恤のあつきと有が
かり心得違と悔悟せりと

今回入港の船舶の時節ぐ何方みても嚴
重に調査あり神戸へ入港の英國船を同
港在留の英國公使館より專らその出入

と取り糾す

是より重岡口黒口峠に激戦ありつる
譯の第三編に記載すべし

西南鎮靜記二編卷之下終

西宮鎮書言

明治十年八月三十日 御届

全 十年十一月 出版

第壹大區十四小區

東京堀江町二丁目九番地

櫻井浪次郎同居

茨城縣平民

編輯兼 出版人 沼尻絰一郎

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館

江島喜兵衛

北島茂兵衛

稻田佐兵衛

山中兵衛

小林新兵衛

丸家善七

村上勘兵衛

中村佐助

牧野吉兵衛

柳川梅次郎

水野慶次郎

林萬次郎

石川治兵衛

荒川藤兵衛

太田金右衛門

北澤伊八

朝倉久兵衛

青山清吉

鈴木忠藏

山中孝之助

山中北郎

東京

東京

王

同	伊勢四日市	赤志忠
尾張名古屋	加藤長太	上同 岐阜水谷善七
片野東四郎信濃長野西澤喜太郎造	栗田東平同上田伊藤甲造	山岸彌左衛門
矢田藤兵衛上野桐生竹内藤吉	鬼頭平兵衛下野宇都宮崎尾新右衛門	
三輪伊次六岩代若松森萬助	三輪文次郎同福島齊藤彦太郎	
菅江笑三陸前仙臺菅原安兵衛	岡崎伊藤文吉同白木安古衛門	
新城葛家英吉羽後秋田本間金之助	豐橋高須又八羽前上山高橋庄三郎	

同	同	同	同	駿	同	同	同	同	同	同	同	同	遠
沼	靜	河	掛	二	見								江
津	岡	藤	川	俣	附								濱
小	吉	廣	佐	淺	大	天	古	白	一	山	齊	松	落
松	成	瀨	藤	井	塚	井	澤	水		下	藤	塚	合
浦	壽	市	俊	安	好	金	良	健	貫	仁	太	聚	清
三			兵	五				二		兵	兵		
吉	郎	藏	平	衛	郎	藏	作	郎	社	衛	衛	人	七
周	同	同	同	越	同	同	同	同	同	越	同	同	同
防	四	葛		後	高					中			山
山口	谷	塚		長	岡					富			形
	濱			岡						山			
阿	佐	弦	松	中	車	川	大	中	守	土	中	平	市
部	藤	卷	田	村		上	橋	川	川	井	川	田	村
準	友	七	周	作	平		甚	甚	吉	宇	久	彌	五
		十			次				兵	三		平	郎
輔	吉	郎	平	平	郎	章	吾	藏	衛	郎	助	治	衛



010190508175

